

平成 2年 5月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

茶の神様

五月に入り、本格的な茶摘みの季節になりました。青梅市内の畑の畦には必ずと言ってよいほど、茶の木が植えられえており、また新町や今井などの市内東部の平野には、広大な茶畑が広がっています。このため、製茶業は青梅市の重要な産業の一つとなっています。

〔茶〕は、ツバキ科の常緑低木で、熱帯から温帯にかけて生育しており、原産地は中国南部の雲南地方だと言われています。このため、加工した後に飲用することも中国が最も古く、4世紀中頃にはすでに医薬品として愛用されていたようです。日本に茶が伝わって来たのは7世紀の初めで、遣唐使が仏教や唐文化などと共に伝えて来たと言われています。しかし、当時、茶を飲用できたのは宮廷の貴族・上級役人や寺院の僧侶などの一部の人たちだけで、一般の庶民の手の届くものではありませんでした。

一般の庶民が現在のように常飲できるようになったのは、栄西の普及によるものです。栄西は鎌倉時代の人で、宋に渡って禅を学び建久2年(1191)に茶種を持ち帰り、背振山(佐賀県)の南麓に位置する東背振村の靈仙寺(石上坊)に植えました。そして、日本最古の茶書である「喫茶養生記」を書いて、茶の効用を説き、喫茶を広めました。その後、栄西の弟子の明恵(1173~1232)は、栄西から茶種を譲り受け、梶尾・宇治をはじめとした各地に分栽しました。

ところで、青梅市の北東端、西武バスの原今井のバス停の近くには、「狭山製茶先哲記念標」と書かれた、高さ約165cmの記念碑が建てられており、その前には「茶の神様」を祀った切妻作りの小さな神社があります。記念碑は185(幅)×130(奥行)×30(高さ)cmと、65×63×30cmの二段の土台の上に立つ、直径約25.8cmの伊豆石で作ったりっぱなもので、明治13年(1880)3月15日に建てられたものです。茶業に関心を持つ100名以上の人々の寄進によって建てられたもので、碑書は出雲大社宮司大教正従五位の千家尊福氏の筆によるものです。そして、これらの記念碑と神社は幅3.8m、奥行4.5m、比高40~60cmの盛土の上であり、これら是指田園が所有する茶畑の中に位置しています。

青梅市今井2丁目の吉田時蔵さんに、この地方の茶の由来について伺いました。吉田さんによると、「狭山茶」と呼ばれるこの地方の茶は、指田氏の御先祖の半右衛門が文政年間(1818~1830)に京都の宇治で製茶法を会得し、広められたとのこと。その後、次第に盛んになり、江戸時代には生糸と共に海外にも輸出されたようです。

(文責 角田清美)